冒険者ギルドの英雄達

シューパズ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
冒険者ギルドの英雄達

【Ｎコード】
Ｎ５９９８Ｉ

【作者名】
シューパズ

【あらすじ】
ついに冒険者ギルドの入団試験に合格し、はれて魔法使いになることができたノイ。ギルドで出会った自分と同じくらいの少年……レインとなんやかんやで一緒に行動することになった。そこから先に待ち受けていたのはノイの、想像を超えるものだった……。ノイとレインとその仲間たちが繰りなす英雄伝説！

プロローグ

キミ達の住む世界と違う……

不思議あふれる世界……

その世界のとある冒険者ギルド……

そこから冒険が始まる！

冒険一　旅立ちの日

「ノイ＝レスタァーシャ様、ギルド登録です」

「やったぁー！！」

僕はノイ＝レスターシャ、１６歳
僕が今いるのは、ソク町の冒険者ギルド
そこのギルド認定試験を受けたんだ
ほかにも試験を受けた人がいて皆発表を椅子に座って待っていた
そこで僕はついに呼ばれたんだ！
喜びのあまり思わず椅子を立ってしまった

僕はこれで冒険者の仲間入り……
念願の魔法使いになれたんだ……
涙が出そうだったけどこらえて、試験官のところに行った

「おめでとうございます、ギルド章とジョブ・メモリーを差し上げます。これで今日からギルドの一員です」

手渡されたギルド章はバッチのような物だった
僕は早速、首元に付ける

ああ……感動が再びこみあげてくる

ジョブ・メモリーは手帳のようなもの

中を見てみるとちょっとした説明と、魔法使いの項目がのっていた
ジョブ・メモリーはジョブの証明や、経験、レベルがのっている物らしい
僕はポケットにそれを入れて試験会場を後にした

ギルドの大広場に出た
そこにはテーブルや、椅子が多くおいており
依頼や、転職するための部屋に通じているなどギルドの顔みたいなものかな？

「人が多いなぁ……あいたっ」

歩いていると人にぶつかってしまったらしい
あわててみたら体の大きい男の人二人がいた
顔もこわもてで顔も心なしか怒ってるような様子
やばい……やっぱりこの人にぶつかっちゃったかな……？

「す……すいませんでした……」

「おいおいどうしてくれんだ……肩脱臼しちまったじゃねぇか」

「この落とし前、きっちり付けてもらうぜ」

二人が口を開いていってくる
ぶつかったと思われる本人は、わざとらしく肩をおさえている

二人とも予想どうりガラが悪い
どうしよう……せっかくギルドに入れたのに……
いきなり大ピンチだよぉ～……

「お前らさ……卑怯だと思わないのか？」

「なに！？」

僕は声がするほうに振り向いた
そこには、椅子に座っていた僕と同年代ぐらいの少年
紅の髪に、整った顔立ち
目は少し吊り上っており、眼の色は蒼く透き通っていた

その少年は僕とガラの悪い二人の間に来た
背中に巨大な剣を背負っているから戦士だろう
ギルド章もちらっと見えたし冒険者には間違いない
僕を助けてくれるのかな？

「なんだお前は……？邪魔すんじゃねえよ」

「痛い目会う前に帰りなボ・ウ・ヤ」

「お前らみたいなのがいるからギルドがうるさくなる……静かにしてくれよ」

勇敢だなぁ……あの人
僕はあんな勇気ないのにさ……

「なめてんじゃねぇよ！」

男の一人が少年に殴りかかる
危ない！
僕は思わず目をつぶってしまった

恐る恐る目を開けてみると、ガラの悪い人は床に倒れていた
もう一人のほうはガクガク震えている
あの少年は……手を払って仕事を終えた感じになっていた

「お……覚えていろよ！」

無事だった方の男は倒れた男を担いで逃げて行った
ああ……よかった……
僕はほっと息を下した

そして僕は、少年のもとに行った

「さっきはその……ありがとうございます！」

「別に……うるさいから黙ってもらっただけだ」

「ずいぶん強いんですね……僕はノイです、名前は何と言うんですか？」

「レインだ……じゃあな」

レインさんは去っていこうとした
僕はそのあとをついて行った

道行く人に軽く挨拶をしながら進んでいく
そして依頼を受ける場所に行った

「今受けられる依頼を見せてくれ……」

そういうと、事務員の人が一覧を出す
レインさんはしばらく迷って一つ選んだ
その依頼は、A級の依頼だった

依頼のランクはG、F、E、D、C、B、A、Sのじゅんに難しくなる
つまりA級は二番目に難しい

それを受けるレインさんって一体……

「まだいたのか……何か用か？」

「あの、その……パーティを組んでくれませんか？」

パーティとは、複数の冒険者が集まって行動する行為のこと
一緒に行動することによって、戦闘などが容易になる
他になんかあったけど……忘れちゃった

「別に俺はソロでも活動できる……」

「一緒に活動してお礼をしたいんです！」

「でもなぁ……」

「いいんじゃねぇの」

レインさんと話していると、二十歳くらいの男性がやってきた
金髪で長い髪の、きれいな顔
腰に銃のようなものをさしているから銃士だろう

「カイル……またお前か……」

カイル呼ばれた人は、レインさんの後ろから肩に手をかけてしゃべる

「またお前ってつれないなぁ、別にこの少年とパーティ組んでもいいじゃねえか。パーティ楽しいぞ」

「あ……あの……」

「お前組んでないのによく言えるな……」

「前は組んでたさ、まあ一緒にやれば。その少年はまだ冒険初心者……上級者が教えるのは当然だろ」

「お前がそこまで言うのなら……まあ組んでもいいけど」

「え！本当ですか！？やったー！」

僕は喜びに満ちた
ようし、レインさんの役に立とう！
恩返しをするんだ

カイルさんは去って行った
仕事があるらしい
カイルさんも強そうだったなぁ……

「おい……ノイとか言ったな……しっかりついてこいよ」

「はい！」

ここから僕の旅は始まる……

冒険二　初めての冒険＜前編＞

僕はその後レインさんとともに、外に出た
ソク町は田舎のほうなので家はあまりない
でも住人の親睦は深く、いい街である
そこから今日、僕は旅立つ……

「ノイ……早く来い」

「あ、はい！」

僕はレインさんの後ろを追う
街の入り口のほうに行って、森のほうへ向かうようだ
あの森は子供のころ、あそこは危険だとよく注意されたところ
今はもう大丈夫……かはわからないけど

「レインさん、この先に行くんですか？」

「ああ、とりあえずお前の実践訓練だよ……武器ぐらいあるよな」

そう言われて僕は腰につけていた、杖を出す
杖はそこに魔力を集中させることにより、魔法を使いやすくするもの
上級者は杖なしでも強力な魔法を行使できる
僕はまだまだ初心者、杖なしじゃ魔法を使えない
でもこれからどんどん上達するんだ！

「お前は魔法使いか……なら最初は“ファイヤ”あたりか」

僕はコクリとうなずく
ファイヤは魔法使いの資格修得必須条件
魔力を炎に変換することによって、炎を発生させる呪文
炎の系統の基本呪文で、これを基盤に展開していく
一番簡単な魔法なので、独学でも十分修得できる

「ここらの魔物は植物や、虫の魔物が多い……じゃあやってこい」

「え？」

僕は思わず聞き返す

「俺は用事があるから適当に修行してて……まあ冒険しょっぱなから死ぬなんてことは、ないと思うよ」

「え？え？一緒にやってくれんじゃ……？」

僕はもうあたふたする
レインさんはいたって冷静
真顔で受けこたえるから逆に怖い

「まあ困った時はこの紙を見ればいいから……んじゃあ」

そう言い残してレインさんは、消えた
正確にいえば光のように消えた
たぶん転移魔法のワープでも使ったんじゃないだろうか
あれはかなり便利で、一人いれば何人でも一瞬で移動できる

てか……僕、取り残されちゃったよ……

「とりあえず……中に入るか…………」

僕はそう吐き、中に入っていく
その途中にレインさんにもらった紙をポケットに入れる
初めての冒険……どうなるかな…………？

――――――――――――――――――――
――――――

俺は転移魔法で、森から少し離れた平野に降りた
そこには木にもたれている、金髪野郎ことカイルがいた

「いいのか？あの少年を一人にしちゃって？」
カイルがニヤニヤしながら聞いてくる
こんな奴だとは前からわかっていたが、改めてウザイと再認識する
言葉自体がウザイわけではないが、表情がウザイ

「お前には関係ない……師匠にもこうやられたしな」

「そうかい、まああの森は大して魔物も強くない…………まあいいんじゃね？」

「それに、もしもの時はお前が助けるんだしな」

「へ？それどういうこと……」

俺はカイルの言葉を完全無視して転移魔法を唱える
A級の依頼をクリアするために、目的地に行くためだ
まあ今回は意外に簡単…………のはず
火山に住んでいるマグマドラゴンを倒す依頼
暑いからいやだな…………まあカイルのウザさよりましか

そして俺は転移した

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――

「ファイヤ！ファイヤ！」

はいノイです……
はっきり言ってピンチです

レインさんが去った後、僕は森の中に入って行った
花が大きくなったイビルフラワーや、蠅が大きくなったビッグフライ
そんな魔物を少しずつ、着実にファイヤで倒していった
けど少し進んだところで、失敗しちゃった……
そこはある魔物の縄張り……ドーゲルの物だった
ドーゲルは群れで活動する獣の魔物
鋭い爪と牙の四足歩行で、茶色い毛並みが特徴
ドーゲルの縄張りは、周りにドーゲルの抜けた爪が並べてある
僕はそれに気づかずに踏んでしまって、ドーゲルに囲まれてしまった
幸いドーゲルは足は遅くて知能も低い、一斉に襲ってくることはなかった
だから僕は一生懸命に戦って現在に至る

「ファイヤ！ファイヤ！……はぁはぁ……」

息が少しづつ上がってきて、体力も奪われていく
魔力も底を尽きかけている
ああ……もうだめか……
冒険最初でこんな結末って……

僕があきらめかけているその時、ふと思い出した
“まあ困った時はこの紙を見ればいいから”

そういえば！

僕は急いでポケットをまさぐる
そして紙のような感触を見つけ、すぐさま出した
こうしているうちにドーベルが向かってくる

紙をみると、召喚印のみが書いてあった
召喚印とはそれを地面に置いて、自分の血を付けて“召喚”と言うと物や召喚獣などが召喚される
これは持っていれば誰でも出来るお手軽なもので、本来の召喚より多少質は落ちる

僕はすぐさま紙を地面に置いて、自分の親指を噛み切った
土壇場だと人間できるんだなと思った

僕は血を召喚印につけて叫んだ

「“召喚”！！」

召喚印が光り輝く

そこの上に出てきたのは人型の物
光っていてよくはわからない
そして光がとまり現れたのは……

「よっ少年」

「か……カイルさん？」

冒険三　初めての冒険＜後編＞

「てかここどこだよ？」

カイルさんは、あたりをきょろきょろ見回した
そして事態を把握したようにため息を尽く

「はぁ……レインが言ってたのはこの事か……」

「てか危ないですよ！」

「んぁ？」

カイルさんの後ろから、ドーゲルが襲ってきたのだ
鋭い爪を出して、吠えながら襲いかかる！
僕は思わず顔を手で覆ってしまった

……

僕は手を顔から恐る恐る離す
するとカイルさんは銃で爪を受け止めていた
そしてもう片方の銃でドーゲルを撃った
ドーゲルの頭は正確に撃ち抜かれて即死

「危ないなぁ……どれ少年、伏せていろ」

「え？」

僕は地面に伏した
草が生えており、下はやらかかったためにあまり衝撃はない

「俺の銃テクニックとくとご覧あれ！カイル流奥義スピンズ・ショット！！」

カイルさんは高速で回転した
そして弾が連射される
僕はカイルさんの下で伏せていたので当たらない
ドーゲル達は次々と倒れて行って、ついに全匹倒した

僕はとりあえず立つ
あたりを確認してやはり全匹倒れている
すごいなぁ……あんなにいたのに……

「少年、急ぐぜ」

「え？」

カイルさんは僕の手をつかんで走り出した

僕は結果的に引きずられる形になった
地面は草だったのであまり痛くはなかったけど恐ろしいほどにすれる
引きずられてよく見えなかったけど、魔物は銃で倒しているらしい

そして森をぬけた……

「やっとぬけたな少年……あれ？どうした？」

「どうしたじゃないですよ……すれて赤くなっちゃったんですけど
……」

僕の腕や、脚はすれて赤くなっていた
少しひりひりする

「悪いなぁ少年……あ、いたいた」

カイルさんはまた走り出した

僕の手を握ったまま……
今度は普通の土なのでかなり痛かった
僕は「痛い痛い痛い痛いです！」と言ったが、その抗議もむなしく止まらなかった

少ししてようやく止まった
僕は痛みに耐えて立ち上がる
そこは街の前……いたのはレインさんだった

「よおレイン、俺を召喚印に勝手に契約しやがってよ……」

「勝手じゃない、この前俺とポーカーして負けて金がないから契約したんだろ……忘れたのか？」

「しらね」

ポーカーに負けて契約って……
しかもカイルさんとぼけてるし
ああもう痛い……

「それより早く宿に行くぞ……依頼終わってかったるいんだよ……」

「へいへい……んじゃいこうか少年」

「今度は引きずらないで下さいよ」

僕は釘を刺しておいた
僕たち三人は街の中に入った
そこはアギル街で、宿が有名な場所
初めて来たんだけど宿……楽しみだ……

僕達は、宿に着いた
意外に普通な感じ
なんかがっかり……

「おいおいレインく～ん……さすがにこの宿はないんじゃないの？
ここさぁこの町で一番レベルが低いんじゃない？」

「え！？そうなんですか？」

「うるさい、別にいいだろ一番近いんだから」

「変わらないなレインのそーゆーとこ」

結局、この街で一番レベルの低い宿に泊まることになった
レベルが低いっていうのも失礼だけど……

中で受付をして、三人で一部屋にすることになった
二階の部屋に上って、部屋に入った
部屋はテーブルとイスが何個がある部屋だった
あとドアが二個ほどあって、一つは寝室で一つは風呂
一番レベルが低いといっても、ソク町よりはレベルが高い

とりあえず僕は風呂に入ることにした
すごいすれて汚れたから
おもにカイルさんのせいで……

「あの……レインさん、カイルさん……風呂は覗かないでくださいね」

「なんでだよ少年、男同士だからいいだろ」

「僕は女の子ですよ……」

そのことを言った途端、コーヒーを飲んでいたレインさんは噴出した
カイルさんは驚いた顔をしている
やっぱり……築いていなかったのかなぁ……

「え？え？まじかよ少年！？いや……少女か……」

「一人称が僕だったろ……まぎらわ！」

「僕の子供のころは周りは、男友達ばかりだったので自然と……」

「それにまあそんなに女っぽく見えないしなぁ……」

「失礼ですね！」

僕はちょっと頭にきたので、さっさと風呂に入った

――――――――――――――――――――――
――――――

はぁ……まじかよ……少年が少女だったとはなぁ……

「あ〜、俺の目もくるってきたかなぁ……」

「お前の目はすでにくるってる」

「相変わらずひどいな！」

レインは相変わらず口が悪いな……
少女は今風呂入ってるから暇だなぁ……

「カイル……そういやぁなぜ御呼ばれしたんだよ？」

「ああ、少年……いや少女がドーゲルに襲われてたんだよ……だから華麗に俺が参上したのさ」

俺はあの時の話を長々と聞かせてやった
かっこいい俺の活躍話を

「んでさぁ俺の銃はどー……」

「それは本当にドーゲルだったのか？」

奴は俺の話を無視して聞いてきた
コーヒーを置いて真剣なまなざしで聞いてくる
柄にもねぇな……

「ああ、正真正銘のドーゲルさ。爪も鋭くて四足歩行の群れ作るあれさ」

「そうか……」

レインは額に手を当てて考え込む
ああ、なんなんだよあいつもう……
昔からマイペースなんだよ……

「あの森にはドーゲルは生息してないはずだ……」

「は！？馬鹿な！？俺は確かに……」

「お前の目を疑っているわけじゃない……ある意味疑っているが」

失礼な奴だな……
たしかにドーゲルはあの森に生息していなかったような気がする

「最近各地で魔物たちの不穏な動きが漂っている…………これもその中の一つなのかもしれない……」
「確かに聞いている……魔物たちの生息地や、行動が変化してきている……」

まさかあれがな…………
俺も真剣に話し始める
これは、あいつに関係するかもしれないからな…………

「俺はおそらく奴が原因していると考えている……」

レインの声は心なしか震えていた
その時、空気読めないかん全開でドアが開いた
茶色い髪をタオルで巻いた少女…だった
――――――――――――――――――――
――――

ああ、いい風呂だった……
僕はパジャマに着替えて、髪をタオルで巻いた
そして、ドアを開けて部屋に入る
中ではレインさんとカイルさんが何か話していた

でも僕が入ってきた途端、やめてしまう
なんだろう？

「風呂あがりましたよ……入っていい……」

あれ……なんだが眠い……
次の瞬間、僕の意識はとんだ……

僕は目を覚ました
そこはベッドの中で、タオルも取れていた
あのあと寝ちゃったんだ……
暗いし、まだ夜か……

隣にはレインさんとカイルさんが寝ていた
あの二人が僕を……

今日はいろいろあったなぁ……
ギルドに合格して、レインさんに助けてもらって、初めての冒険をして、またピンチになって、今度はカイルさんに助けてもらって……
今日は疲れたよ……
でも楽しかった……
また明日からがんばれるようにぐっすり寝ることにしよう！

僕はまぶたを閉じて、眠りに就いた……

冒険三　初めての冒険＜後編＞（後書き）

どーもシューパズです
ああ、疲れたなぁ（爆
とりあえずひと段落！
みんな読んでくれるといいなぁ
では

冒険四　目的地決定！（前書き）

前書き　更新めっちゃ怠っていたシューパズです！
テスト期間でなかなか時間が取れなくてなんデス
まあとりあえずどうぞ！

冒険四　目的地決定！

―ママァ、どこへいくの？―

―ママはねぇ、これから冒険に行くの―

―いつかえってくるのぉ？―

―いつか帰ってくるからいい子で待っててね、ノイ……じゃあね―

―いかないで！いかないでママぁぁぁぁぁぁ！！―

「うわぁ！」

気がつくとそこは布団の中だった

さっきのは夢……
パジャマは汗でぬれていて気持ち悪い
とりあえずベッドから下りて、大きい部屋に行く

そこではレインさんがすでに旅の支度をしていた
昨日つけていた簡単な鎧を着て、近くに鞄や大剣がある
椅子に座って、半分寝ているような感じだった

「レインさん、早いんですね！」

僕は明るく聞いてみる
しかし、レインさんの返事はない
近くに行ってもう一回繰り返し言ってみる
しかし返事はない……
代わりに静かな寝息が聞こえる

完全に寝てる……

この瞬間僕の脳内で、半分寝ているじゃなくて完全に寝ているに変わった
よく見れば目もつぶってるし、顔も穏やかになっている
寝ているレインさんって意外にかわいいかもしれない……
普段のしまった顔はなく、少年のような幼さの残っている顔だった
僕がレインさんに近付いていると次の瞬間、目をかっ開いた

“パチッ”とか“パチリ”じゃなくて“カッ！”だった

「おはようさん、ノイ」

「あ……おはようございますレインさん」

レインさんは背伸びをして、あくびをした
やっぱり完全に寝ていたのか……

「ノイさ……早く着替えていくぞ」

「あ、はい！」

僕は洗面所のほうに行って、着替え始めた

数分後……

僕は魔法使いの法衣に着替えた
上と下がつながっているタイプで、緑と白を基本とした色
昔から着ていて、お母さんからもらった大切な法衣

僕は洗面所から出て部屋に入った

またしてもレインさんは寝ていたので、軽く無視して部屋を出ようとしたら起きた

「そういえばカイルさんは？」

さっきから見当たらないので聞いてみる
昨日までは気さくに笑っていたのに

「あいつなら……帰ったよこの紙を残して」

僕の驚きをよそに、レインさんは紙を投げてきた
予想以上に紙は飛ばずに、ペラリと落ちていく
僕は仕方なく拾いに行った

その紙にはこう書いてあった

『拝啓レイン君&少年改め少女
この手紙を読んでいるってことは俺はもう……いなくなっているだろう
まあ変な意味じゃなくて宿から、いなくなるって意味ね』

頭にカイルさんの笑う顔が浮かぶ

『俺は多忙の毎日をおくってるからさ、もう行かなくちゃいけないのさ
まあ、今度あったらよろしくな
お前たち見ているとパーティーの良さに改めてきずいたよ
じゃあなアディオス・アミーゴ！』

ここで手紙は終わっていた
いかにもカイルさんらいい手紙だった

「んまぁ行くかぁ……」

レインさんは椅子から腰を上げた
鞄も下げて、大剣を後ろにつける

「ノイ！出発だぞ！」

「はい！」

レインさんの後ろについて部屋を出る

受付でのやり取りを済ませると宿を出る
今の時間は朝のちょっとすぎの時間で晴れていた
温度も良好、快適な日だ
それでもレインさんは、疲れた顔だ

「そーいやーさあ……魔法使いのレベル上がった？」

「え？」

「ジョブ・メモリーだよまったく……」

「あ！」

僕はやっと気付いた
ジョブ・メモリーには、職業の熟練度……レベルも記録される
そういえば結局昨日は確認していない
僕は鞄からジョブ・メモリー出した
ページをめくり、魔法使いの欄を見た
レベルは……3！

「3です3！！やったぁー！」

「レベル3だと……アクアを覚えるんじゃないか？」

魔法使いの修得技をみると確かにアクアが追加されていた
アクアは水を操って、すごい勢いで相手にぶつける魔法
ファイヤよりは威力は劣るけれど、相性が合えばバツグンに強くなる

「すごいですねレインさん、その通りですよ」

「まあ、俺は魔法使いの資格持ってるし」
「そうですか……ってえぇぇぇぇ！」
レインさんが魔法使いの資格を持っている？
だって……明らかに戦士なのに……
「驚くことはねえだろ……俺はほかにもいろいろな資格を持っている」
レインさんはジョブ・メモリーを渡してくれた
僕はそれを読んでみると驚いた
ほとんどの基本職の資格を持っており、上級職もいくつかある
「すごいですね……こんなにあるんですか……」
「まあな……とりあえず行くか」
「どこに行くんですか？」
「目的地は国の都市、アルエストだ」
「アルエスト！？」
僕は驚いて、叫んでしまった

アルエストは、この国の都市
ギルドの本拠地もあり、国家の中枢部
そんなとこに行くのか……

「まあ、長旅にはなるな……準備はいいか？」

「……あ、はい！」

アルエスト……ここに行けばもしかしたら……
そのためにも頑張ろう！
僕は立派な冒険者になるんだ！

ここからが本当の冒険の始まりだ！

冒険四　目的地決定！（後書き）

はい……なんかびみょーな仕上がりです
なんというか……てきとーというか…
まあ次からはガンガン行っちゃいます！
戦闘とかも入っちゃいますよぉ
感想は随時お待ちしておりますではでは

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5998i/

冒険者ギルドの英雄達

2010年10月9日04時08分発行